

社会学委員会
災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討分科会
(第25期・第6回)

議事要旨

日時：令和3年11月19日（金） 15時05分～17時15分

場所：オンライン会議

出席者：吉原直樹（委員長）、山下祐介（副委員長）、浅川達人（幹事）、青柳みどり（幹事）、池田恵子、岩井紀子、岩渕明、奥村弘、玉野和志、増田聡、町村敬志、山川充夫

欠席者：島蘭進

陪席者：樋口紫（復興知見班・観光L・復興五輪推進T）

<議事>

(1) 前回議事要旨の確認

原案どおり承認された。

(2) 研究報告（奥村弘委員）

「日本における大規模災害時の歴史資料保全活用と災害資料保存活用の実践的研究の展開」

奥村委員の報告を受けて、総合的な討論を行なった。

(3) その他

次回分科会については、幹事と打ち合わせをした上で、2、3か月以内に開催することとした。

以下、議事録詳細版です。

吉原：前回議事録要旨の確認をお願いしたい。意見があれば後ほど。

(2) 研究報告

奥村弘委員報告：「日本における大規模災害時の歴史資料保全活用と災害資料保存活用の実践的研究の展開」

< 質疑応答 >

吉原：今日の報告は、多面的に展開された。残り 30 分の時間内で、質問・意見・論点を出して欲しい。

山川：(1) 1980 年に福島大学に赴任し、震災 2 年後までいた。庄司吉之助さんが福島県内のほとんどの地域の歴史を書き残している。その伝統があるのかもしれない。富岡・双葉・浪江は故郷を失ったという思いを持っている人が多い。これを次世代に伝えていきたい。(2) 福島では当たり前の日常を奪い去られた。生きてきた証はどこにあるのか。そういう思いが強いだらう。福島県の伝承館に福島大学の関係者がいる（瀬戸さん）。物へのこだわりもある。福島未来支援センターにつとめていた人も、歴史資料を残すことに努力している。復興庁予算から、理屈がたてば支出できることも大きいのではないか。(3) 大字史について。クラウドファンディングで残している。(4) 今後の展開：高校教育において歴史総合、地理総合が必修化される。地理総合と歴史総合の連携を強める必要があるだろう。(5) 先日の防災関係の大会（@釜石）で報告したが、故郷創造学を総合的学習の時間を使って学習している。そこと連携しながら進めることもできる。未来創造学も地元のメンバーと連携しながら行われている。こういった学校教育との連携で、福島の場合は進むのではないか。

奥村：福島大学の阿部先生、菊池先生にはお世話になった。福島県は県立博物館を中心に、地道な調査をたくさん行っている。

吉原：モニタリングの方法と課題を掲げている。専門知と社会知（市民知）が、どのように相互浸透するか教えて欲しい。

奥村：歴史領域では、文字を媒介せず、語りや儀式などを通じて伝えられてきた知がある。意識かされないけれど残されてきたものが、コロナの中で解体する可能性がある。

町村：(1) こういう活動を持続させるのが難しいという話があった。持続させるための知恵やノウハウがあったら教えて欲しい。(2) 大学や研究機関が資料を残すということはある。が、市民活動の記録は、どのように残されるのだろうか。

奥村：(2) について。阪神淡路大震災の時は都市型の災害であった。1月に入って、3月末に帰ることが多かった。諸団体が、自分たちがやったことをどう記録するか、という観点から、連合団体に資料を保存するようになった。人と防災未来センターをつくる前段の組織が、大規模に資料を保存した。後半では市民が残した記録を積極的に集めるようになった。東日本大震災の場合は、そこがうまく行かなかった。必ずしも、そうならなかった。避難所に医者が入ったので、カルテの端に記録が残ったりしている。団体が自分で記録を残すという形態にはならなかった。広すぎて、誰が音頭をとるかが難しい。各府県でもできないし。(1) について。文化遺産については、博物館が重要な役割を果たした。人間文化研究機構とも連携して取り組んだ。地元の博物館の三者で組んで行っている。2月に研究交流集会を行っており、横にネットワークを広げている。

岩渕：(1) 岩手県の復興委員会、国の復興委員会のメンバーとして議論に参加したが、200ページを超す復興の記録集を出した。市町村は1ページしかない。県の記録には、市町村の具体的な記録はない。個々には行すが、統合した形で、記録をまとめることができていない。(2) 伝承館ができた（災害ツーリズムで）。修学旅行で行くので、コロナでも来訪者が減らない。

奥村：前者について。本当に大事な点が把握できているかは、大きな問題。葬儀屋の聞き取りをした。震災の記憶を作っていく時、何を大事にしなければならぬかを検討した。それがよかったかどうか、検証しなければならない。アカデミックな世界や行政な世界に戻して、検証する必要がある。

増田：東北では、各市町村の復興誌が出ているが、スタンダードがないので、地域間比較ができない。

奥村：阪神は、狭い地域が集中的に被災したのに対して、東日本大震災は広域であり、全体像をどのように把握するかは難しいだろう。基本的なデータを収集して、分析するシステムを構築することを提案していったらよいと思う。

山川：福島県には復興庁が相当なお金を使って、国際研究拠点をつくることになっている。グローバルな話ばかりで、ローカルな、被災地になにが貢

献できるのだろうか。国際発信よりむしろ、モニタリングのためのアーカイブの拠点が必要だろう。

吉原：震災資料を民間企業が引き取っていくものもあるだろう。ヘリテージインダストリーに継承されていくものと、地域センターで継承されていくものと、どのようにコラボしていくのか。

奥村：長期的な対応となると、企業は弱くなる。富士フィルムや冷凍倉庫の会社は、震災資料の保存に関する知識や技術を継承している。農村地域だと自然・歴史・民俗を含めた総合的な利用が行われている。歴史は歴史だけだと無理なので、総合的に動く必要がある。遺産整理は産業になってきており、連携を取り始めている。

池田：アーカイブのユーザーの広がりの可能性について教えて欲しい。

奥村：地域の資料は、触ったりすることもできる。こどもたちは、触感なども通して学ぶ。今の博物館では、小学生でもわかるキャプションを書けと言われていている。日常性や文化を考える仕掛けを、こどもたちに提供していきたい。

吉原：人文科学の役割については、次の機会に詳しく伺いたい。次回は、復興庁の関連者から話を聞く？

青柳：東北に3局あるが、選挙になってそのまま手をつけず。。。

吉原：幹事と打ち合わせをして、みなさんに提案したい。とりあえず、今日はお任せいただきたい。できるだけ早く方向を決めたい。そのうえで、日程をおはかりしたい。2・3ヶ月以内に次回を開催したい。前回の議事録は承認されたとして、確定したい。

以上